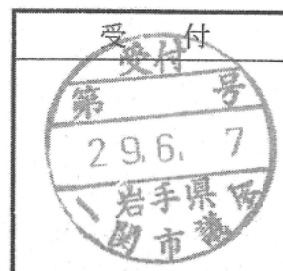


# 報告書

一関市議会議員 千葉 大作 様



報告年月日	平成29年 6月 7日		
視察期間	平成29年 5月10日～平成29年 5月12日		
視察先	福岡県・みやま市、大分県・日田市、杵築市、豊後高田市		
視察用務	みやま市	みやまスマートエネルギー（みやまんでんき）	
	日田市	バイオマス発電（バイオマス資源化センター）	
	杵築市	大分農業文化公園	
	豊後高田市	昭和の町、移住定住	
報告者	(会派名) 緑清会	(代表者) 沼倉憲二	
参加者	沼倉 憲二 千葉 満 小野寺道雄 小山 雄幸 勝浦 伸行		千田 恭平 佐藤 雅子 武田 ユキ子 佐藤 浩
報告要旨	1. 視察目的 別紙(1) 2. 視察先概要 別紙(2) 3. 参考とすべき事項・所感 別紙(3)		
主要資料名			

## 別紙（１）

### １．視察目的

①「バイオマス産業都市」に九州で初めて選定されたみやま市において、資源循環型のまちづくりに取り組み、特にエネルギーの地産地消の取り組み、再生可能エネルギーの普及、そして地域でエネルギー会社を創出した「みやまスマートエネルギー株式会社」の先進的な取り組みについて研修を行う。

②環境都市日本一を目指して取り組みを進めている、日田市のバイオマス発電事業について視察研修を行う。日田市バイオマス資源化センターは、豚糞尿処理と生ごみ処理の連携により脱焼却のごみ処理を目指している。当市が現在進めているバイオマス発電事業と同様の施設であり、その役割と運営状況、稼働状況についての課題について研修を行い、当市の取り組みの参考とする。

③当市において、現在世界農業遺産登録に向けた取り組みがスタートしましたが、今回、「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」が世界農業遺産として、平成25年に認定されました。今回その地域に隣接する「大分県立農業文化公園」を視察し、世界農業遺産とのかかわりや農業文化公園の取り組みについて研修する。

④昭和の時代に大きな賑わいのあった中心商店街も、人口の減少や車社会の進展、そして郊外型大型店の支出により、衰退が著しく進んでしまった商店街の歴史を振り返ることで、昭和に焦点をあて、商店街が最も元気だった最後の時代に着目し商店街の再生を図ったまちづくりの取り組み、さらに、それに伴う観光の取り組み、移住定住の取り組みについて視察研修を行う。

## 別紙（２）

### 視察先概要

- ・ 福岡県 みやま市

みやま市は、平成19年に瀬高町・山川町・高田町の3町が合併して、福岡県28番目の市として誕生した。人口38千人余りで、福岡県の南部に位置し、西部に有明海の干拓地が広がり、森林面積が小さく。小作比率45%という田園都市である。肥沃な土壌と豊富な水に恵まれ、全国屈指のみかん・ナス・セロリ・たかなや海苔の産地となっている。当市と同様に人口減少が進んでいて、月平均500人程度の人口減少が進んでいる。現在活力ある地方創生を目指した取り組みとして、新しい形のエネルギー政策に取り組んでいる。

- ・ 大分県 日田市

日田市は、北部九州のほぼ中央、大分県の西部に位置し、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々に囲まれた面積666.03平方キロメートルのまちであり、市ホームページによると「古くから北部九州の各地を結ぶ交通の要衝として栄え、江戸時代には幕府直轄地・天領として西国筋郡代が置かれるなど、九州の政治・経済・文化の中心地として繁栄し、当時の歴史的な町並みや伝統文化が、今なお脈々と受け継がれています。」と紹介されています。人口67千人余りであり、古くから林業盛んな地域である。

- ・ 大分県 大分県立農業文化公園（杵築市）

杵築市にある日指ダムのダム湖周辺に建設された農業体験が可能な農業公園で、その敷地面積は約120Ha（内ダム湖37ha）を誇る。農業を知る（発見）、農業で遊ぶ（参加）、自然と親しむ（癒し）の3つをテーマに、交流研修館、豊の国物産館、レストラン館、花昆虫館からなる中心施設と、フラワーガーデン、ハーブガーデン、薬草薬木の森、果樹園、貸し農園（クライנגアルテン）、コテージ、オートキャンプ場、ふれあい動物園などの屋外施設が設けられている。

- ・ 大分県 豊後高田市

豊後高田市は、大分県の北東部に位置し、面積206Km<sup>2</sup>であり、豊かな自然温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候である。人口約23千人であり、瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富な市域であり、仏教関連の仏像が多数あり、文化的な歴史の香りが漂う街並みである。

## 別紙（3）

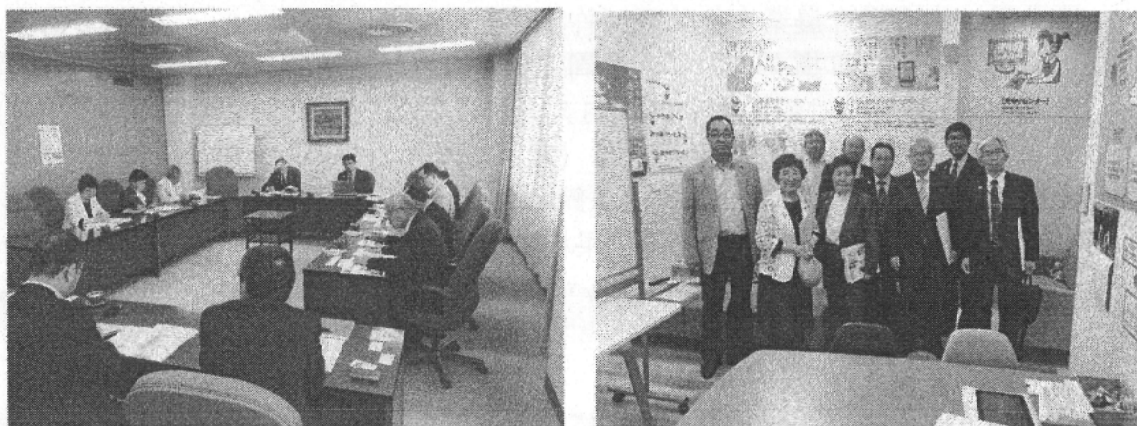
### 3. 参考とすべき事項・所感

#### みやま市 「活力ある地方創生を目指した地域新電力の挑戦」について

みやま市においては、日照量に恵まれた地の利を活かし、再生可能エネルギーの普及に力を入れている。「エネルギーの地産地消」による地域経済の循環、地域の雇用創出など活力あるまちづくりに取り組んでいる。

みやま市では、電力自由化に伴い自治体としていち早く電力会社を設立し、地域課題の解決、エネルギーセキュリティーと地域経済活性化に取り組んでいる。「みやまスマートエネルギー株式会社」は、みやま市が55%出資しスタートした。電力会社として、価格競争に対応していくために、非価格競争の構築に取り組んでいる。その一つが市民サービスの一つが、大規模 HEMS 情報基盤整備事業に参画し、生活総合支援サービスに繋げる形で、電力データを利活用したサービスの票確認を実行している。また、電力販売とセットで「生活総合支援サービス」に取り組んでいます。先進的な取り組みとしては、電力の見える化に加え、タブレット端末を利用して簡単に操作できる、生活支援のサービスに取り組んでいる。

このみやま市が取り組む、自治体初の電力事業、市民や商店とも一体となったサービス事業、市民との対話型コミュニティづくりが、地方創生につながる先導的モデルとして、2015年度グッドデザイン金賞に選ばれている。

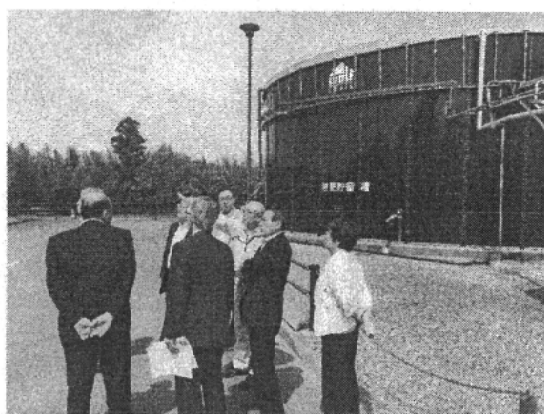


当市としては、バイオマス産業都市に指定された事もあり、電力を中心とした「エネルギーの地産地消」に本格的に取り組むことが重要と考える。

#### 日田市 日田市バイオマス資源化センターについて

日田市バイオマス資源化センターは、生ごみ(家庭系・事業系)、家畜(豚)糞尿、およびその他(焼酎かす等)をメタン発酵し処理し、メタンガス発電によるエネルギー(電気・熱)の回収を行い、さらに処理汚泥はたい肥(袋詰め堆肥・液肥)として、再利用を図っている。平成18年4月より事業開始し、今年3月で10年経過している。発電量は、およそ186万kwhであり、電力収支として売電金額が5,400万円、買電が2,600万であり、およそ2,800万円ほどの収入があるが、運営費用から見れば、管理費に予算がかかるため、施設維持費として、年約1億1千万ほどの赤

字となり、一般会計からの繰り入れとなっている。今後においては、「低炭素・循環・自然共生」地域創生実現プラン策定事業の一環で、「日田市モデル地域創生プラン」を策定し、将来的には浄化センター、環境衛生センター、バイオマス資源化センターを段階的に統合、施設を整備することで、バイオマス系の資源の効率的な処理と発電を実現していく。当市としては、今後バイオマス発電事業に取り組む予定であるが、日田市のような先進地の取り組み状況を十分検討し、慎重な取り組みが必要と考える。



#### 杵築市 大分県立農業文化公園

開園初年度は目標を上回る約 46 万人が訪れたそうであるが、私たちが訪れた日は、好天に恵まれたこともあり、その施設の広大さと施設の充実ぶりに驚いたが、数字が示す通り、入場者の伸び悩みを実感することとなった。現在においては、目標とする年間 25 万人に届かない入場者数の状況が続いているため、大分県の行財政改革の一環として施設運営が見直され、2005 年（平成 17 年）1 月から、花昆虫館などの一部施設をのぞき、入園料が無料化されている状況である。また、この公園の開園に伴い、大分自動車道や大分空港道路と接続する宇佐別府道路の公園隣接地点に大分農業文化公園 IC が新設されているため、交通の便は非常に良いが、施設利用者の増員に結びついていない印象を受けた。当市においても、この施設と類似した施設「花といずみの公園」があるが、大きな投資を伴う施設の維持管理において大きな課題を実感した。当市としても、今回「食と農の景勝地」に認定されたことを受け、今後様々な取り組みが進められると思うが、十分な検証と設計を慎重にしていく必要性を実感した。





## 豊後高田市 「昭和の町」のまちづくりについて

豊後高田市では、商業と観光の一体的振興として、商業者・観光まちづくり株式会社・商工会議所・行政の4社が一体となり連携体制を深めながら活性化に取り組んでいる。「昭和の町」のまちづくりは、衰退する中心市街地の起死回生をかけて、商工会議所が大手広告代理店に再生プラン「豊後高田市商業活性化構想」を策定したが、巨額の予算が必要となるためお蔵入りとなった。しかし、この失敗を契機に、「豊後高田市商業まちづくり委員会」が立ち上がり、中心市街地の個性を探し出すため、数年をかけ、江戸時代から現代までの歴史調査を実施し、「豊後高田市市街地ストリート・ストーリー」を完成させた。その結果、商店街が最も元気だった「昭和」を「まちの個性」としてアピールできれば面白いまちづくりができるということにたどり着いた。



その後、商店街の振興に“観光“という要素をプラスして、商業と観光の一体的振興に取り組んでいる。この事業は、全国的にも様々なメディアに取り上げられたこともあり、大きな成果、そして観光に寄与している。また、商店街の空き店舗に移住定住者が新たな起業ができるシステムを構築している。(写真左は、新たな移住者が空き店舗を活用して始めたお店)



当市においては、直ちに参考として取り組める事業ではないが、千厩町の商店街の取り組みなどと類似したものが見受けられた。地域の活性化は、その地域のマイナスとみられる点を逆転の発想でプラスとしていく視点を変えた取り組みが重要と考える。また、新しいアイデアや発想は、様々な市民の皆さんから出てくると考えられるので、地域協働体での取り組みの参考にもなるものと考えます。